

HELLO ハローインタビュー



在シンガポール日本国大使館 公使

ほつたとおる
堀田亨さん

日本とシンガポールの交流が節目の年を迎える今、両国の架け橋として活躍する堀田亨公使にシンガポール人の日本人会事務局スタッフがシンガポール人からの目線でSJ60についてお話を伺いました。

本省勤務一筋で多彩な経験を積み、昨年シンガポールに赴任した公使は、日々の生活や外交の現場で、この国の魅力と可能性を実感されているといいます。インタビューでは、両国関係の歴史から、文化交流の手応え、そしてSJ60に向けた展望まで、多岐にわたるお話が語られました。そこには、国と国、人と人をつなぐ外交のダイナミズムと温かさが感じられました。



聞き手
日本人会広報部理事
高柳直明

日本人会事務局スタッフ
Ms. Rebecca Chay

SJ60特別インタビュー



SINGAPORE - JAPAN DIPLOMATIC RELATIONS 1966 - 2026

レベッカ 堀田公使のこれまでの経歴について、教えていただけますか。

堀田公使 私は1996年に外務省に入省しましたが、よほど運が悪かったのか、入省2年目から2年間の英国留学を除いて、ずっと東京の外務本省で仕事をしてきました。本省では非常に幅広い経験を積むことができ、地域で言えば北米、欧州、ASEAN、分野で言えば国連、報道対応、国際法などの業務を経験してきました。また、財務省と内閣官房に出向する機会もありました。

昨年になって、外務省の人事当局に、これだけ本省で仕事をしてきたのだから世界で一番の海外任地に赴任させてほしいと強く陳情しましたが、おそらくそれが認められてシンガポールに赴任することになったのだと想像しています。

レベッカ 堀田公使がシンガポールにいらして生活されてみて、シンガポールの国やシンガポール人について、どのように感じていらっしゃいますか。これまでに生活された他の国と比べてどのような違いがありますか。

堀田公使 シンガポールでの生活は言うまでもなく極めて便利で快適です。日本の食品や日用品などが豊富に手に入ること、様々な手続がスムーズに進むこと、公共交通機関が日本の大都市並みに発達していることなどに印象づけられています。シンガポール政府職員をはじめ、仕事相手としても極めて接しやすい人々であると思います。お話ししたとおり、これまで海外生活をしたのは英国だけですが、歴史的経緯から、シンガポールの政治制度や教育制度などいろいろなところで英国の影響を感じています。シンガポール英語を聞き取る感覚も少しづつ身についてきました。

政府職員として言えば、シンガポールは、やはり小国であるという強い意識からか、人材や財政資源を何に優先的に投下すべきかという「選択と集中」が非常にはっきりしている国であるという印象です。日本の行政はどうしても「総合的」な方向に向きがちですが、この点は特にシンガポールに学ぶべきであると考えています。

レベッカ 堀田公使はシンガポールでの休日は何をして過ごしていらっしゃいますか。

堀田公使 現在単身赴任中ということもあり、また私はゴルフもやらないので、基本的には一人で時間をつぶしています。あちこち歩き回ったり読書したり、時には持ち帰り仕事が発生することもありますが…。

あとは、単身の気楽さもあり、毎回2～3日の日程で、近くの国にこまめに旅行に行くようにしています。小さい頃から歴史が好きだったので、旅行目的は基本的に史跡巡りですが、東南アジアは学生時代にひととおり回ったきりなので、各国とも30年間で同じ国とは思えないほど発展していることにも新鮮な驚きを覚えています。

レベッカ 堀田公使のシンガポールでのお仕事について、教えてください。

堀田公使 大使館での役職は、大きく分けて二つあります。一つは、次席館員として館内のマネージメントを取り仕切ること、もう一つは、経済班長として、シンガポールの経済官庁や民間企業とのやりとりや、日系企業の皆さんとの協力関係を進めていくことです。

次席館員としては、日本の「顔」である大使の外交活動ができるだけ円滑に進むように裏方を務めるとともに、それぞれの担当分野で最前線に立つ各館員がアイデアや熱意を心置きなく発揮できるよう助言をしたりといったことに気をつけています。また、経済方面では、特に日系企業の皆さんとのイベントなどに御招待いただく機会が非常に多く、知識と経験の幅を広げる貴重な機会を頂いています。

レベッカ 2025年にシンガポールはSG60、国家樹立60周年を迎えること、その翌年にSJ60、シンガポールと日本との外交関係樹立60周年を迎えることを知りました。まだ堀田公使も生まれる前のことですが、シンガポールと日本の外交関係が始まった経緯について、教えていただけますか。

堀田公使 日本は早くも明治時代に、当時は英國の植民地だったシンガポールに領事を派遣しています。欧米諸国と肩を並べる近代国家になろうとしていた日本にとって、当時から東西貿易の結節点だったシンガポールがいかに重要だったかの表れだと思います。

第二次世界大戦後、シンガポールがマレーシアの一州として英國から自治権を獲得していく中で、当時州首相だった後リー・クアンユー・シンガポール首相が、日本占領下で非常に困難な経験をされたにもかかわらず、シンガポールの発展のために日本との協力が不可欠であるとの英断を下され、日本企業のシンガポール進出が復活しました。このように、戦後のシンガポールとの関係もまた経済面から始まりました。今年は両国の国交60周年ですが、例えばジェトロシンガポール事務所はそれより更に10年前、1956年に開設されています。

こうした積み重ねの上に、日本はシンガポールが独立を宣言した1965年8月9日に直ちに国家承認を行った上で、速やかに外交関係開設の調整を開始し、1966年4月26日に両国間の外交関係が開設されるに至りました。

レベッカ 現在、シンガポールと日本とはとても良好な関係にあると思います。大使館の皆さんは外交関係を築く上でどのようなことを大切にいらっしゃるのでしょうか。

堀田公使 各館員とも、それぞれ自分なりに工夫しながら日本とシンガポールの関係発展のために尽力していますが、あえて共通点を申し上げれば、シンガポールという国の魅力を日本にどう売り込むか、という点が重要だと思います。



Chiang Rai Blue Templeにて

外交官である以上、日本をシンガポールに売り込むのは当たり前のことですが、加えて逆もまた重要です。シンガポールとの関係を深めるという利点がありますよ、ということを日本の各官庁、各企業、各大学や研究機関に対して、それぞれのニーズを踏まえてピンポイントで売り込んで行くことが、一般論に終わらない、実益ある関係の深化につながっていきますし、それがまたひるがえって、シンガポール側に対して日本を売り込む具体的な材料にもなります。

特にシンガポール人は一般的に極めて合理的な人たちですので、こういう案件と一緒にやっていくとお互いに利益になりますよね、というストーリー性を持ったアイデアを出し、実現していくことが、我々の役割ではないかと思います。

レベッカ 私自身は日本との文化交流にも興味があります。シンガポールにおける日本文化の受け入れ方について、どのように感じていらっしゃいますか。

堀田公使 シンガポールの皆さん日本文化への愛の深さにはいつも圧倒されています。伝統文化やアニメをはじめとする現代文化、あるいは日本の旅行先であっても、多くの日本人にさえあまり知られていないこと、あるいは行ったことがないところを詳しく知っているシンガポールの方に、既に何人もお目にかかりました。日本の外交官として、また一人の日本人として、大変誇らしいことです。

私の個人的な理解ですが、日本の文化がシンガポールの皆さんの中に響く一つの要因は、実は日本文化も多文化共生の結果であるというところにあるのではないかと思います。日本文化の多くは日本の純粹培養ではなく、以前は中国や朝鮮半島の文化、近代には欧米文化を貪欲に取り入れ、それらを日本の文化や日本人の考え方・ライフスタイルへと融合させていった結果であると思います。

最近面白かったのは、実は大使館のソーシャルメディアで、日本の庶民的料理やいわゆる「B級グルメ」を紹介しているのですが、その中で、ナポリタンスパゲティがなぜか多くのリアクションを獲得しました。なぜだろうと思ってあるシンガポールの方に聞いてみたところ、「材料も調理法の基本も全部西洋由来のものなのに、日本にしかない料理を作ってしまうところが面白い」とのことでした。

レベッカ SJ60をどのようにシンガポールで祝う予定ですか。どのようなイベントや活動があるか教えてください。

堀田公使 2016年、SJ50の際には、様々な文化団体や日本・シンガポールそれぞれの企業などが実施されたイベントが約200件に上りました。今年も前回を上回る規模のイベントを実現したいと思っております。今回は特に、SJ60公式イベントとし



日本人会ゲストルームでのインタビューの様子

(左から)日本人会広報部高柳直明理事、
日本人会事務局スタッフ Ms Rebecca Chay、堀田亨公使
インタビューは2025年11月28日に行われました。

での認定手続を大幅に簡素化しましたので、是非積極的な企画・応募をお願いします。

また、来年を通しての大きな山場は、SJ60実行委員会が実施する旗艦イベントです。これは11月28日、29日に、食や観光から日本の最先端テクノロジーに至る様々なブースや各種ステージパフォーマンスで構成される、今の日本を総合的に紹介する極めて大規模なものとなります。具体的な内容は鋭意企画中ですが、これから準備作業を加速し、日本人会会員の皆さんにも随時案内させていただきたいと思いますので、ふるって御参加ください。日系企業の皆様による出展も歓迎です。

レベッカ SJ60ロゴに込められた意味について教えてください。

堀田公使 SJ60ロゴのデザイン案は幅広く公募を行い、200件前後の応募を頂きました。優勝作品は、ある在日シンガポール人の作品となりました。

この作品は、デザイン的に見ても、全体が「日の丸」の中につきりまとまっているながら、その中にライオンヘッドと桜という両国を象徴するアイコンが配置され、融合されている点、また60という数字の視認性にも優れている点が高く評価されました。総じて、日本とシンガポールの一体感をインパクトある形でまとめているところが、両国のこれから友好関係を象徴するにふさわしいものであると思います。

レベッカ シンガポールと日本との未来における重要な課題は何だと思われますか。

堀田公使 シンガポールと日本は、安定した国際法秩序の維持・発展、自由で開かれたグローバルな貿易・投資など、多くの戦略的利益を共有しています。経済・社会問題をとっても、それぞれ世界第1位・第2位の長寿国としての高齢化社会への対応、食料やエネルギー資源の自律性確保とサプライチェーン強靭化などの課題を共有しています。

個別の課題を挙げていくときりがありませんが、今後の両国間関係の基本的な方向性は、これまで以上に課題解決型の協力を強化していくことだと思います。両国が知恵を出し合い、まずは両国に共通する課題へのソリューションを特定し、社会に実装していくこと、またその果実を二国間に留めるのではなく世界が利益を得られるものにしていくことが求められています。

来年は、SJ60を機に、国民間の交流に加えて、日本・シンガポール政府間でも、このような今後の二国間協力の方向性を包括的にまとめていくという機運が高まっており、既にシンガポール政府と様々な検討を開始しています。その中でもやはりグリーンやデジタルといった新たな課題の解決に向けて両国で知恵と知見を出し合い、世界に還元していくという考え方方がメインになってくると予想されます。

高柳理事 堀田公使は日本人会顧問としても日本人会の活動をサポートをさせていますが、日本人会の活動に対する思いなどあれば、伺わせてください。

堀田公使 日本人会の活動の規模の大きさや活動のすそ野の広さ、シンガポール社会への定着ぶりにはいつも驚いています。また、日本人会の活動を支える理事会や事務局の体制もしっかりしていると思います。

私は外交官ですので、あくまで日本という国のプレゼンスをシンガポールでどう高めていくかという観点を重視しています。その観点から、大使館、日本人会、JCCI、ジェトロなどの政府系機関がもっと連携し、相乗効果を出していくことが大切だと思います。大使館の事業を日本人会にお手伝いいただ

くことで、日本全体のシンガポールでのプレゼンスは高まると思いますし、逆に日本人会の事業を大使館でお手伝いすることによって同じ効果が得られると思っています。日本人会の活動が日本全体の利益になると信じる場合は、日本人会から頼まれなくともいろいろ「押しかけ」でお手伝いを申し出ることもあるかと思います。

レベッカ 最後に日本人会会員の皆様へのメッセージをお願い致します。

堀田公使 シンガポール日本人会は、規模、歴史、地元社会との連携など様々な点から見て、世界各地の日本人会の中でも非常に活発に活動されていると思います。シンガポール在留邦人数は3万3千人と、国単位で世界第11位、都市単位で世界第5位の規模を誇り、シンガポール社会に非常に深く根を下ろしていますが、これも日本人会の活動に支えられてこそではないかと考えております。

SJ60を盛り上げ、日本とシンガポールの友好の歴史を将来につないでいくためには、日本人会の皆様の御協力が不可欠であり、理事会や事務局の皆様を通じて、大使館として更に連携を深め、広げていければ幸いです。また、大使館は決して「敷居の高い」ところではありませんので、もし我々の方でお力になれそうなことがあれば、是非遠慮なく御要望、御提案をお寄せいただくようお願いいたします。

インタビュー後談

初めて堀田公使とお話をさせていただき、終始恐縮しながら多くの学びを得ることができました。特に心に残ったのは、堀田公使の大変誠実で温かいお人柄です。幅広いご知識をお持ちながらも、どのお話も分かりやすく、私の拙い質問にも丁寧に向き合ってくださいました。外交や日本に関する内容だけでなく、物事に対する誠実な姿勢にも触れ、身の引き締まる思いでした。

また、さまざまな視点から示唆に富むお話を伺い、今後の日星関係について、私自身も理解を深めるきっかけをいただきました。このような貴重なお時間を頂戴し、本当にありがとうございました。加えて、公使のお言葉の一つひとつが、今後自分がどのように学び、行動していくべきかを考える大きな指針となりました。今回得た学びを糧に、より広い視野を持って物事に取り組んでいきたいと強く感じております。改めて、心温まるご指導と励ましに深く感謝申し上げます。

(レベッカ)



(左から)日本人会広報部高柳直明理事、
日本人会事務局スタッフ Ms Rebecca Chay、堀田亨公使